

映画『嗚呼 満蒙開拓団』と講演で私が学んだこと

加納 佳子

朝鮮半島、中国大陸、そしてアジアの国々に侵略して植民地化するための国策により、甘い言葉で大陸に狩り出され、かけがえのない人生を踏みにじられ翻弄された人々、そして戦況の悪化で敗戦が時間の問題となった時にもなお、執拗に狩り出された人々の当時の様子を、大類様のお話と満蒙開拓団の記録映画によって知ることができました。

この有様を知り、言いようのない憤りを強く感じています。さらに許されないのは、戦況の悪化により撤退を余儀なくされた時に、開拓団派遣を机上で立案(?)し、施策発令の中心となった人物や、大陸の栄華を貪った人々はいち早く情報を察知して、不法に蓄えた富と一緒に我先に帰国をし、一部の人たちではあると思いますが、戦後64年、今は何事もなかったかのごとく涼しい顔で口を拭って形や姿を変えて、再び国民の血税を貪っていることに強い怒りを感じています。

満蒙開拓団の真実の一部が収められた記録映画の鑑賞の前に、講演でお話になられました悲惨なさまを知る機会を得たものとしては、大陸に置き去りにされた開拓団の人々の『声なき声』は、時を経ても、より多くの人々に知らせていく役目を今の私たちがいただいたと思っています。

そして現在では、戦前とは形を変えた「狩り出され見捨てられて置き去りされる」状況に、枚挙にいとまはありません。その例のひとつに、低所得高齢者問題があります。

介護を必要とする低所得高齢者が、介護職員が十分に措置されていない老人施設に収容(狩り出され)され、その施設の高齢者の介護をする人たちの勤務条件や、低賃金の劣悪条件や環境の中、火災や災害などの緊急時に入所者を助け出せない体制、つまり見捨てられ置き去りにされる条件のままで運営している施設が多く、火災や災害が発生したとき自力で逃げることのできない高齢者の方々が、置き去りにされ見捨てられていとも簡単に命を奪われています。

また、低賃金や過酷な労働条件で働いている職員の一部の中には、不満のはけ口として身動きのできない高齢者の方を、繰り返し虐待するなど被害が出ています。時代と現場は大きく違いますが、経済的な弱者が常に危険の最前線に置き去りにされている現状は、先の大戦時の国の政策根幹とは何ら変わらないのではないのでしょうか。使いたくない言葉ではありますが、まさしく歴史は繰り返されている、と思わざるを得ません。

次代を担う世代にも事実に基づいた歴史認識を正しく伝え、人の命を簡単に奪い去る連鎖をどこかで断ち切らねばなりません。社会的に弱い立場の人々が、真の幸せを実感できるような政治を行っていけるように、一人ひとりが歴史の背景や真実を学び、まずは今行われている政治に関心をもって、社会的に一步踏み出すことが求められていると思います。

(かのう・よしこ：1944年生まれ。島根県雲南市在住。幼児教育に38年間携わる。夫の父(義父)は硫黄島で戦死。戦争遺児として成長してきた過程を見聞きする中で、戦争の過ち再び繰り返してはならないという思いを強くもち、松江での自主上映会に参加)